
ゲゲゲの鬼太郎の世界にとある一行がやってきました

初心者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲゲゲの鬼太郎の世界にとある一行がやってきました

【Nコード】

N5643N

【作者名】

初心者

【あらすじ】

ゲゲゲの鬼太郎の世界になぜか殺生丸一行がきたらのお話。キヤラ崩壊があるかもしれません

現れた妖怪（前書き）

まずは冒頭から

現れた妖怪

深い森の中そこに1人の少女がいた。

しかし少女は1人ではなかった。

少女は双頭の竜みたいな妖怪の背中に座っていたのだ。

俺は久々に人間を襲えると確信したのもつかの間だった。

どうにかしてあの妖怪の注意を引けたら。

近くを探すと石を見つけた。

俺はそれを掴むとその妖怪の近くにうまく投げた。

コッソ

妖怪の注意が石に移った。

いまだ

俺は飛び出し少女に襲いかかった。

はずだった。

一瞬何かが目の前を通り過ぎたと思ったら身体がまっぴたつにされた。

意識が無くなっていく。

すると近くで小さな妖怪が俺を切り裂いた者の名前を言った。

「殺生丸様」

俺は誰にも伝えることもなく意識がそこで消えた。

とある一行（前書き）

原因は？

とある一行

ある日のこと久しぶりに会ったりんと邪見、阿咩とともに河原で休んでいたときに突然空に穴が空いてりんが吸い込まれそうになった。りんを掴んだときにはもう穴の中で脱出は不可能だったそれどころか一緒に邪見と阿咩も一緒に吸い込まれてしまっていた。

「チッ」

舌打ちをしたのはいいがそのまま流されていった。

そのとき天生牙が脈を打った。

後ろから何かが近づいてくる。

わたしはにおいでそれがわかった。

それを掴む。

（鉄砕牙）

鉄砕牙はなぜか結界を私には発動せずに私の手に納めた。

両方の牙が脈打ちなにかの力が天生牙に流れる。

鉄砕牙を腰に納め天生牙を抜いた。

そして天生牙の導きに振った。

「冥道残月破」

そこに入ると再び天生牙が脈打つ。

もう一度放った。

すると外に飛び出した。

りんを私が抱き抱え邪見は阿咩にしがみついていた。

ふわりと地面に着地した。

殺生丸が吸い込まれたときの犬夜叉たち。

いきなり鉄砕牙が脈打ちなぜか鉄砕牙がふたつになって一つが空にできた穴に飛び込んでいった。

殺生丸一行（前書き）

紹介から

殺生丸一行

殺生丸

戦国時代最強クラスの大妖怪

武器

天生牙

一度なら死者をよみがえらせることができる。

この世ならぬ者を斬ることができる

天下覇道の三剣の一つ

現在冥道残月破が復活

鉄碎牙

一振りで百の敵をなぎ払う。

天下覇道の三剣の一つ

現在なぜかふたつになって一つが殺生丸の元にある。

爆碎牙

殺生丸が手にした牙

一振りで敵に大打撃を与えるのみならず回復効果すら無効にする力がある

邪見

殺生丸について行っている妖怪

人頭杖という武器をもっている。

阿吽

双頭の竜の妖怪

りん

殺生丸にとって唯一無二の存在の人間の少女

妖怪たちの依頼（前書き）

何事もなく過ぎます

妖怪たちの依頼

ゲゲゲハウスには鬼太郎を含めたいつもの一行がいた。

「どう思いますかとおさん？」

「んーんわからんのう」

目玉のおやじが悩んでいる。

「こんなに妖怪が消されているのはなにかあるんじゃないのか？」

砂かけ婆がいった。

「ここ数日で10人の妖怪が何者かにやられているからこまった」

子なき爺が石になりながらも悩んでいた。

「鬼太郎行ってみない？」

猫娘が誘ってきた。

「そうですね試しに行ってみましょう」

するとポストに手紙が入った。

手紙には一言「助けて」と書いてあった。

「まずはこちらからですな」

鬼太郎は立ち上がり――反木綿にまたがり猫娘と一緒に飛び立った。

妖怪たちの依頼（後書き）

次回からいきなり戦闘です

鬼太郎の戦い

「へっへっへ」

「誰だおまえは？」

「俺は土叉、最近人間の子供をさらっているのは俺のことよ」

「子供たちを返せ」

「返せと言われて返す奴がどこにいる？」

土叉は戦う気だ。

鬼太郎は髪の毛を一本抜いてもすごく長い針のようなものにした。

「へっへっへ俺のスピードについてこれるかな？」

鬼太郎と土叉の戦いが始まった。

一方猫娘は

「誰もいないみたいね」

どこからおそわれても大丈夫なように周囲に警戒していた。

すると近くで水音がした。

音の近くまで行くと信じられない光景をみた。

少女が小さな妖怪と川で魚を捕まえていたのだ。

「これは？」

近くで双頭の妖怪が寝ていてその近くですごく美しい髪をした妖怪が腰を降ろして少女を見ていた。

「邪見様そっちに行きましたよ」

「よし、トリヤツ」

捕まえるのに失敗したのか小さな妖怪はひっくり返りずぶ濡れになった。

「邪見様ずぶ濡れ」

少女は笑っていた。

しばらく見ていたすると

「なにを見ている」

先ほどの美しい髪をした妖怪が座りながら話しかけてきた。

（バレた）

私は飛び出した。

「すつすみません」

「殺生丸様お魚とれたよ」

少女が近づいてくる。

少女は私に気づいた。

「誰？」

「私猫娘よ」

「妖怪ですか？」

「ううん半妖になるのかな」

「ふうん」

「あっそうだここから離れてください」

「どうして？」

少女が聞いてきた。

殺生丸と呼ばれる妖怪は冷たい目で私を見てきた。

少し恐怖を覚えたが話を続けた。

「最近妖怪が何者かにやられているんです。ここは危険です」

「なーんじゃそんなことか」

邪見と呼ばれる妖怪が言った。

「おそらくその何者かはここに仰せられる殺生丸様がやっつけているのだ」

「あなたが」

「これっ殺生丸様をあなた呼ばわりするな」

「殺生丸どうしてそんなことをするんですか？」

「たわけ、妖怪がワシたちを襲ってくるから殺生丸様がやっつけるんじゃない」

真実が明るみになった。

「そうだったんですか」

「そつだよ殺生丸様は優しいんだよ」

猫娘にはそうは見えなかった。

すると殺生丸が立ち上がった。

その瞬間後ろから大きい妖怪がでてきた。

（なにこれ？私じゃ倒せない）

殺生丸が近づいてくる。

「伏せろ」

私はその場に伏せた。

殺生丸は私を素通りし妖怪を一撃で倒した。

「あっありがとう」

「なにもおまえを守るためにやったわけではない」

そう言って殺生丸は少女を見た。

（あの子が大切なんだ）

「行くぞ」

「待ってください」

「なんだ？」

「あつてほしい人がいるんです」

「ついていこうよ殺生丸様」

「これ、りんそれは殺生丸様が決めることだ」

「はぁーい」

りんと呼ばれる少女はうなずいていた。

「こちらです」

私たちは鬼太郎の元へ向かった。

そのころ鬼太郎は

「うわぁー」

土叉の速さに翻弄されてピンチに陥っていた。

「がんばるんじゃ鬼太郎」

「はい、もしかしたらこいつが妖怪ごろしかも」

「そうかもしれんのう」

そのとき妖怪リーダーがすごい反応をした。

「とてつもない妖気がこちらにきます」

「なんじゃと？」

「猫娘も一緒のようです」

「なにをよそ見してる？」

「くっ」

ふらふらになりながらも立ち上がり相手をみた。

「これで終わりだ」

土叉はすばやい動きで近づいてくる。

(やられる)

次の瞬間、土叉が止まった。

見ると土叉のおなかに何者かの腕が突き刺さっていた。

「ぐおおお」

土叉が苦しみだした。

土叉の後ろで長身の妖怪を見た。

「鬼太郎」

猫娘が近づく。

「大丈夫？」

「あああいつは？」

「殺生丸よ」

「殺生丸？」

「なんじゃと？」

目玉のおやじが顔を出した。

「殺生丸殿初めてお目にかかります鬼太郎の父の目玉のおやじじゃ」

「ほう私を知っているのか？」

「おい貴様」

土叉が殺生丸に食ってかかった。

「貴様何者だ鬼太郎の仲間か？」

殺生丸はただ一言。

「貴様こそ誰だ？」

「なっ見ず知らずの者にいきなり攻撃したのか？」

「許せん」

土叉はまた素早く動いた。

「土叉の負けじゃな」

おやじはそう言った。

その瞬間、殺生丸は何かを掴んだ。

その何かは土叉だった。

そして空に放り投げ光のムチで土叉を粉々にした。

出会った幽霊族と大妖怪

「つまりあなたがここら辺に住み着いている妖怪を倒していたんですね」

「……………」

「理由はわかりました。それなら僕の出番はありませんね」

「そうじゃわい殺生丸様は理由もなく妖怪を倒したりしないわい」

「いくぞ」

「はい殺生丸様」

りんは阿吽の綱を持って殺生丸について行った。

そのとき

「鬼太郎」

砂かけ婆が血相をかえてやってきた。

「婆どうしたんですか？」

「妖怪城が動き出したんじゃ」

「なんだって？」

「妖怪城だと？」

殺生丸が食いついた。

「なんだそれは」

「城そのものが妖怪の妖怪です」

「ほう」

「前に戦ったときは中から破壊したのに今回はどうやったの？」

「そいつが暴れたらどうなる？」

「焼け野原になります」

殺生丸は振り返ってりんを見た。

「邪見」

「はい殺生丸様」

「りんを連れて安全なところに」

「わかりました」

「それなら妖怪横町に」

「邪見ついて行け」

「はい」

「殺生丸様」

りんが殺生丸を呼んだ。

殺生丸がりんをみる。

「待ってます」

りと邪見は猫娘と砂かけ婆と一緒に妖怪横町へ向かった。

鬼太郎は一反木綿にまたがり飛んだ。

殺生丸はフワリと宙に浮くと後ろから鬼太郎の後についていった。

「とうさん殺生丸はあてになるんですか？」

「そうじゃなあ戦国最強クラスの妖怪じゃからたよりになると思っ
の」

「わかりました」

しばらく飛ぶと妖怪城が見えてきた。

決戦妖怪城

そこは戦場だった。

ぬらりひょんが操る妖怪城に鬼太郎が来る前に他の妖怪が足止めをしていたのだが4つの龍、土龍、水龍、炎龍、風龍の力によって倒されていた。

「鬼太郎」

「ぬらりひょん」

「今回ばかりは倒されるわけにはいかないぞたとえ新手をつれてきてもな」

ぬらりひょんは殺生丸のことを言っていた。

「あれが妖怪城か？」

殺生丸はぬらりひょんを完全に無視していた。

「やれ妖怪城」

「はい父上」

妖怪城はどこからともなく妖怪を出して鬼太郎と殺生丸めがけて攻撃を命じた。

「あんなにたくさんどうやって？」

すると殺生丸が前にでた。

「下がっている」

殺生丸は刀を抜いた。

「これは？」

「鉄砕牙だ」

「鉄砕牙？」

ボロ刀だと思った瞬間刀は妖刀に変化した。

「いいかよく見ておけ一振りだ」

鉄砕牙になにやら力が集約する。

「なにが始まるんだ」

「一振りで」

殺生丸は鉄砕牙を振る体勢になって

「百の敵をなぎ倒す」

殺生丸が鉄砕牙を振った瞬間、鉄砕牙がなにやら剣圧みたいなものが飛び出し妖怪城の出した妖怪を一瞬でなぎ倒し塵とした。

「なぜじゃ？」

ぬらりひよんは戦慄した。

妖怪城がだした妖怪たちを妖刀を一振りしただけで消し飛ばしたことに、おそれを感じていた。

「もつとだやれ」

妖怪城は土龍、水龍、炎龍、風龍をだし、合体攻撃をした。

「でかすぎる、殺生丸逃げましょう」

しかし殺生丸はまた鉄砕牙を振ろうとしていた。

「あれじゃあ返せませんよ」

「あんな簡単な技が鉄砕牙の力だと思ったのか？」

すると鉄砕牙がうなる。

そして合体攻撃のある一点を殺生丸は鉄砕牙を振った。

「爆竜破」

なんと自分たちを襲おうとした合体攻撃が威力があがり妖怪城へと逆流した。

もはや妖怪城になすすべはなかった。

爆竜破は妖怪城の四方にある龍の塔を破壊した。

4つの龍が消滅する。

爆竜破は勢いを止めることなく妖怪城本体に攻撃した。

妖怪城が破壊されていく。

「脱出だ」

ぬらりひょんは慌てて脱出した。

そのすぐあと妖怪城は塵となり消滅した。

爆竜破も妖怪城を破壊し終わった後自然と消滅した。

「おのれ鬼太郎めそしてあやつめ」

「あやつとは誰だ？」

振り返ると妖怪城を破壊した本人が現れた。

「おのれ」

ぬらりひょんは刀を抜いて殺生丸に向かった。

「死ねええー」

だが殺生丸は違う妖刀を抜いた。

「爆砕牙」

ぬらりひょんは一瞬に爆砕牙と呼ばれる妖刀に斬られた。

犠牲者たちを（前書き）

最終回です

犠牲者たちを

「殺生丸様」

りと邪見が阿吽とともにやってきた。

「さすがは殺生丸様」

鬼太郎は地面に這いつくばっていた。

「みんな済まない僕がもう少し早く着ていれば」

「助けたいか？」

「えっ？」

「助けたいのかと聞いている」

「はい」

殺生丸はもう一つの刀を抜いた。

そして一振りした。

すると見る見るうちにやられた妖怪たちが目をさました。

「ありがとう殺生丸」

「救えるのは一度だけだ」

すると空に穴が空いた。

「いくぞ、りん、邪見」

「はい、殺生丸様」

殺生丸たちと阿咩は空に空いた穴に飛び込んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5643n/>

ゲゲゲの鬼太郎の世界にとある一行がやってきました

2010年10月9日10時17分発行